

生態系に被害を及ぼす **特定外来生物**

～きれいな花でも「栽培禁止」～

オオキンケイギクの 駆除について

オオキンケイギクは、きれいな黄色い花を咲かせる植物ですが、生態系等に被害を及ぼすおそれがある生物として、外来生物法の**特定外来生物**に指定されています。**育てたり、持ち運んだり、販売することなどは法律で禁止されていますので絶対に行わないでください。**

(違反した場合は最高で3年以下の懲役若しくは300万円以下の罰金又はこれを併科されます。)

茨城県生物多様性センター

★オオキンケイギクが特定外来生物に指定された理由

特定外来生物とは、海外起源の外来種で、生態系などに被害を及ぼすもの、又は及ぼすおそれがあるものとして外来生物法に基づいて指定された生物です。

オオキンケイギクは、北アメリカを原産とする多年性植物で、日本には1880年代に人の手で園芸用として持ち込まれました。その強健さから緑化にも用いられましたが、あまりに強靱なため、野生化して全国的に分布を拡大し、大群落を作って、在来の植物の生育地を奪い、それまでの景観を一変させてしまいました。

このようなことから、環境省は、平成18年2月にオオキンケイギクを特定外来生物に指定し、栽培、保管、移動、譲渡、販売などを法律で禁止しました。

茨城県内では、交通量の多い道路脇や中央分離帯、あるいは河川敷などに群生しているのが見かけられます。



★オオキンケイギクってどんな植物？

茎 1つの株から複数の茎が束になって生えるのが特徴です。高さは30~80cmになります。



花 5月から7月頃に5~7cmの黄色い花を咲かせます。花びらのフチは不規則にぎざぎざしています。八重咲きのものもあります。花が咲き終わるとたくさんの小さい種ができます。種は翼状の形状を持ち、風によって道路沿いなどに広く散らばります。



* 花びらの形には多くの変異があります。



葉 生え始めの葉は細長いへら状をしています。

成長するにしたがい、葉に切れ込みができ、やがて1枚の葉が複数に分かれたように見えるのが特徴です。

根元近くの葉は大ぶりで、柄が長く、多いものだと10以上に切れ込みます。

茎の途中の葉は柄が短く、切れ込みは3~5程度です。

葉のフチはなめらかでぎざぎざはありません。

よく見ると葉の表面には毛が生えています。

葉の表面の毛



越冬 越冬時は葉が放射状に地面に張り付くように広がります(左)。暖くなると再び茎が高く成長します(右)。地下茎からは、複数の株立ちが見られます。



越冬時の株



春に再び成長を始めた株

発芽して間もない葉はへら状をしています



成長するにつれて葉が切れ込みます



茎の途中から生える葉

根元近くから生える葉(これで1枚の葉です)



★オオキンケイギクの駆除

オオキンケイギクのような繁殖力が強い生物が侵入・定着すると、昔からその土地にいた植物がいなくなったり、私たちが子どもの頃から慣れ親しんできた風景が一変してしまったりします。

オオキンケイギクを駆除することで、地域固有の生態系を守り、私たちがこれまで地域の自然から受けてきた恩恵を将来の世代に引き継ぐことができます。

駆除のポイント

- **できるだけ根ごと引き抜く**
多年草で再生力が強いので、根を残すと翌年また生えてくる可能性があります。
- **できるだけ種ができる前に駆除する**
種が飛散する前に駆除すれば、翌年に新しい芽が出ることを防げます。
種ができた後に引き抜く場合は、できるだけ種を落とさないようにしましょう。
- **引き抜いたらすぐにゴミ袋に入れる**
引き抜いたものが風で飛び散らないようにしましょう。
- **交通事故やけが、日射病などに注意する**
車道や中央分離帯などの危険な場所には立ち入らないようにしてください。
暑いときは、帽子をかぶり、十分な水分をとりましょう。
- **継続的に駆除する**
種や根が残っていると駆除しても翌年また生えてきます。
一度で根絶することは難しいので毎年根気強く続けることが効果的です。



★駆除したオオキンケイギクの処分方法

1 引き抜いたら、袋に入れてしっかり縛って密封し、2～3日その場で天日にさらして枯らします。



2 枯れたら、燃えるゴミとして回収に出すか処分場を持ち込んで処分します。



オオキンケイギクは特定外来生物なので、生きたまま（枯らさずに）保管、移動することが原則禁止されています。ただし、地域住民や自治会、ボランティア等による小規模な駆除の場合は次のような特例があります。

○ 地域住民や自治会、ボランティア等による小規模な駆除の場合の処分の特例



事前に、「実施主体」、「実施日」、「実施場所」を、チラシ、掲示板、回覧板などで公表しておくことで、駆除した後枯らさずに運搬することができます。

この場合も、駆除したら飛散しないようゴミ袋に入れてしっかり縛って密封し、すみやかに燃えるゴミとして回収に出すか処分場を持ち込んでください。
(平成 27 年1月9日 環自野発第1501091号運用通知)



★茨城県内の団体等による活動

茨城県内では、毎年多くの団体等が、オオキンケイギクなどの外来生物の駆除活動を行っています。2019年度は、特定外来生物除去・啓発イベントとして、16の団体、合計約900名の県民の方々の参加・協力により、9市村の16ヶ所において約8.5tのオオキンケイギクなどの特定外来生物の除去が行われました。これらの活動により、地域の生態系の保全が推進され、また参加された多くの方が生物多様性への理解を深め、地域の環境に対する関心を高めるきっかけとなっています。

2019年度の特定外来生物除去・啓発イベント実施団体

かすみがうら市よもぎ会、ひたちなか市の環境を良くする会、かさま環境を考える会、ごみを考える会、笠間市、国営ひたち海浜公園、なか環境市民会議自然環境部会、茨城生物の会、水戸市、里地・里山むくの木会、玉造ふるさとの自然に親しむ会、ホテルネットワークmito 逆川こどもエコクラブ、鉾田市まちづくり推進会議環境部会、常陸太田市市民環境会議環境部会、自然友の会、ほか（順不同）

生物多様性センターのHPでも活動の様子をご紹介します。生物多様性センターの取り組み(2019年度)のページをご覧ください。
https://www.pref.ibaraki.jp/seikatsukankyo/shizen/tayousei/activities/2019/2019_activities.html

★オオキンケイギク(キク科)と似ている植物と見分け方

ハルシャギク(キク科)



ほそ
葉が細く、花の中心から花びらの付け根にかけて赤褐色のものが多いたが違います。茎の高さは同程度、花の大きさは同じくらいか小さめです。開花時期は5~8月頃です。 **生態系被害防止外来種**

キバナコスモス(キク科)



花の色や大きさ、茎の高さなどは似ていますが、葉がこまかく切れ込むことで区別できます。開花は夏~秋です。元々は園芸品種ですが野生へ逸出しているものも見られます。 **外来種**

キクイモ(キク科)



花の色や大きさは似ていますが、花びらの縁が整っていること、葉が切れ込まないこと、茎の高さが1~3mくらいになることで区別できます。開花時期は8~11月頃です。根茎は食用としても用いられます。 **外来種**

アラゲハンゴンソウ(キク科)



花の色や大きさ、茎の高さなどは似ていますが、花の中心が濃茶色で盛り上がること、葉に切れ込みがないこと、葉及び茎に剛毛があることで区別できます。開花時期は6~10月頃です。 **生態系被害防止外来種**

ツワブキ(キク科)



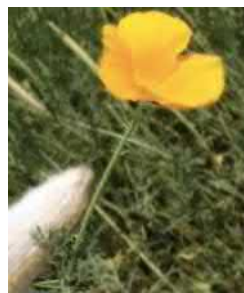
花の色や大きさは似ていますが、葉が大きくて丸くフキの葉に似ていることで区別できます。開花は10~12月です。葉は冬でも緑のままです。 **在来種**

ヒマワリ(キク科)



一部の園芸品種には、花の大きさが似ているものがありますが、葉が丸くて大きいことで区別できます。開花時期は夏です。 **外来種**

ハナビシソウ(ケシ科)



花の色は似ていますが花びらが大きく4枚であること、葉はがほそくこまかく分かれていることで区別できます。開花は4~6月頃です。 **外来種**

ブタナ(キク科)



花の色は似ていますが、大きさが直径2~3cmと小さくタンポポに似ていることで区別できます。茎は高いもので80cm位。開花は春~秋です。 **外来種**

※ オオキンケイギクによく似ている植物は、これらのほかにもたくさんあります。見分けるときは花や葉の形をよく観察してみましょう。
※ 区別が難しい場合は、茨城県生物多様性センターまでお問い合わせください。

外来種子防三原則

悪影響を及ぼす外来種を 入れない	飼育・栽培している外来種を 捨てない	すでに野外にいる外来種を 拡げない
----------------------------	------------------------------	-----------------------------

駆除のやり方、ほかの花との見分け方などのお問い合わせ先
茨城県生物多様性センター

〒310-8555 水戸市笠原町 978 番 6
電話: 029-301-2940 ファックス: 029-301-2948
メール: tayousei@pref.ibaraki.lg.jp